

〔大島特産園芸作物における生産振興技術対策〕

ツバキを食害するエダシヤク類の発生推移

～利島におけるトビモンオオエダシヤクの増加傾向～

竹内浩二・嶋田 綾*・林 明彦*・畑中佑紀*・三田一也・嶋田竜太郎

(島しょセ大島・*大島支庁産業課)

【要 約】2013 年春期における利島のハスオビエダシヤク幼虫密度は 0.29 採集数/分/人と昨年より低かったが、トビモンオオエダシヤク幼虫は 0.97 と高かった。一部のツバキ林では、目立った食葉被害が発生し、林床の蛹密度は最大 0.63 採集数/分/人であった。

【目 的】

大島管内のツバキは国内でも最大規模の油糧生産があるだけでなく、枝物、苗木としての出荷、観光資源としても最重要の品目である。エダシヤク類の幼虫は伊豆諸島のツバキなどで過去に大発生したことが知られ、利島ではハスオビエダシヤクの多発により 1972 年などに大きな被害があった。このため、大島支庁、大島町、利島村などと協力して本種の発生量を定期的にモニタリングし、計画的な防除対策に活用する。

【方 法】

1. ハスオビエダシヤク等の発生量調査 (97 年～) : 毎年 5 月上～中旬に、島内 10 地点前後 (図 2) で幼虫の時間単位採集法 (3～6 名 1 組で、3～5 分間) にて実施した。本年は 5 月 13 日に 7 名で実施し、7 月中旬に利島村役場から島内の一部でツバキの食葉被害が目立つとの連絡があり、追加して 8 月 1 日にも 8 名で調査を行った。
2. ツバキ林床土壌中の蛹密度調査 : 8 月 1 日、12 月 3～4 日に概ね幼虫の調査地点と同じ場所で土中の蛹を時間単位採集法 (6～7 名、5～10 分) で調査した。

【成果の概要】

1. 5 月におけるハスオビエダシヤク幼虫密度は 0.29 (採集数/分/人) と昨年より低下したが、トビモンオオエダシヤクは 0.97 と増加した (図 1)。
2. 8 月 1 日の調査では一部でツバキ樹上の葉が食べ尽くされている激しい食葉被害が見られた。食葉被害度指数は島内平均で 27.3, 最大で 75.0 と高く、東部中腹の 15～17ha 程度は種実生産や生育に影響を及ぼす被害が発生していると推察された (図 2)。ツバキ樹上にいるエダシヤク類幼虫はほとんどがトビモンオオエダシヤク終齢幼虫 (図 3) であった。被害の目立つツバキ林床の土壌中から蛹または前蛹も見つかった。採集後、飼育中の蛹から、8 割を超える高率でブランコヤドリバエ、サムライコマユバチの一種が羽化してきた。
3. 完全に蛹化している時期である 12 月の調査ではトビモンオオエダシヤク (と考えられる) 蛹 (死亡した殻を含む) の密度は 0～0.63 頭/人/分で、平均すると 0.17 頭/人/分であった。島内東側の一部でやや高い密度のエリアが認められた (表 1)。
4. まとめ : 利島のハスオビエダシヤクは昨年に比べやや発生が少なかったが、トビモンオオエダシヤクは一部でやや多発生し、食葉被害が目立った地域があった。
5. 留意点 : 春期の幼虫密度調査ではトビモンオオエダシヤクがここ数年増加傾向にあり、来春の調査後に一部エリアのエダシヤク類に対する防除が必要になる可能性がある。

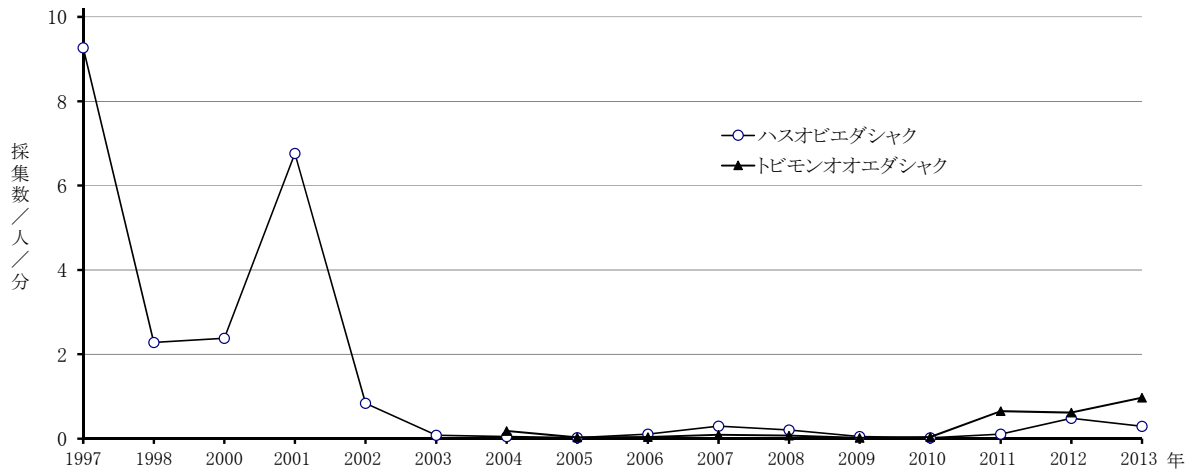


図1 ハスオビエダシヤクとトビモンオオエダシヤク幼虫の密度推移 (利島)

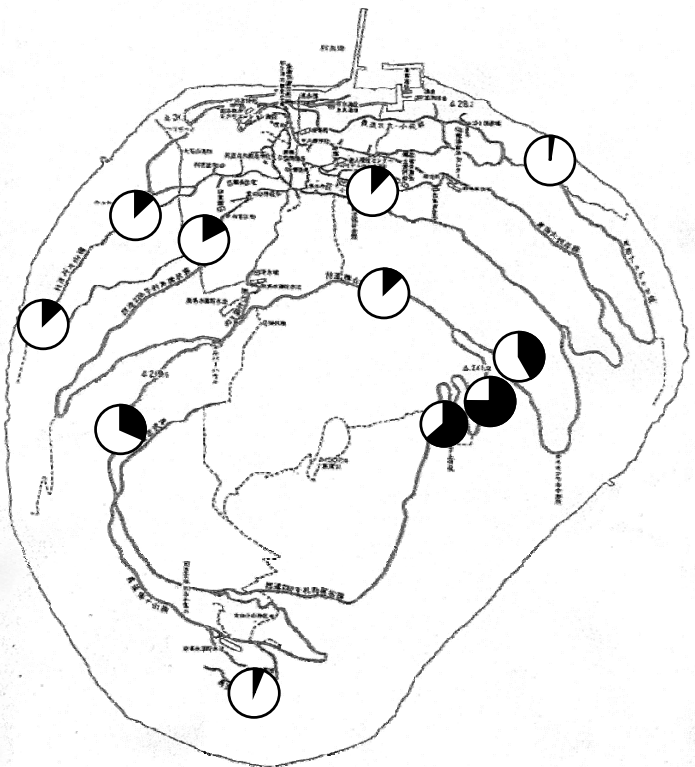


図2 利島調査地点とツバキ食葉被害状況

調査地点を円で示し扇形で被害度指数^aを表す。
被害度0：食害無、1：微、2：中（着葉30-70%）、
3：甚（着葉30%以下）

a) 被害度指数 = (3 甚 + 2 中 + 1 微) / (3 調査樹数) × 100



図3 トビモンオオエダシヤク老齢幼虫 (体長約80mm)

表1 利島ツバキ林床におけるエダシヤク類蛹密度調査結果 (2013年12月3~4日)

調査地点数	総採集蛹数 (うちトビモンオオエダシヤク ^a の数)	採集数 ^a /人/分 (平均)	採集数 ^a /人/分 (最多地点)
15	174 (171)	0.17	0.63

a) サイズ, 形状からトビモンオオエダシヤクと推察された蛹。